



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

『感染症の世界史』(石弘之著)という本を読みました。

鳥インフルエンザ、SARS(重症急性呼吸器症候群)、新型コロナウイルス…昨今、短いスパンで恐ろしいウイルスが発生する最大の原因は、人間による自然破壊だと書かれています。

新型コロナウイルスは、コウモリから別の動物を介し人に感染したとの見解をWHO(世界保健機構)は出しています。自然破壊によって棲み処を奪われた野生動物たちと人間との距離が近くなり過ぎたのです。野生動物から見れば、生命を脅しているのはウイルスではなく、人間の方だといえるでしょう。

この人は、今の時代を見据えていたのでしょうか。作家であり、自然環境保護に命をかけた。

152 作家 C・W・ニコル



命をかけて取り組んだ環境保全

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

た、C・W・ニコルさんが4月3日に亡くなりました。享年79。死因は、直腸がんとの発表です。

ニコルさんはイギリス生まれ。17歳のときにカナダに渡り、水産調査局の技官として海洋哺乳類の調査探検を始めます。20代で、空手の修行のために来日し、日本の自然の多様性に感動。40歳で長野県に移住を

決め、荒廃した里山を自費で買い取って生態系の復活に取り組みました。1995年には、日本国籍を取得。日本人より、日本の自然を愛してくれた人です。

ニコルさんが直腸がんを診断を受けたのは2016年。化学療法と手術を受けて回復していたものの、昨年に再発したようです。

大腸がんは、場所によって結腸がんと直腸がんに分類されます。直腸とは、肛門から20センチほどの部分を指します。初期症状はほとんどありませんが、進行してくると下血が見られます。しかし、痔と自己診断したり、

恥ずかしいという思いから、進行するまで受診しない人が多くいます。大腸がんは、日本人が最も罹りやすいがんです。しかし、

「治るがん」の代表格ですから、早期発見できないのはとても残念なこと。進行がんは下血の他に、便秘や下痢症状、また便が細くなるなどの症状が見られます。身に覚えのある人は、必ず検査を受けてください。早期発見できれば100%に近い治癒率です。ステージ3でも、5年生存率は7割以上。だから、大腸がんで死ぬのはもったいないよ、と患者さんには常日頃言っています。

ニコルさんも、再発はしたものの、発覚から4年近く、講演や執筆活動で環境保全の必要性を訴え続けておられました。「素晴らしい森が蘇るには、まず自然が見えること、感じる

ことができる人が必要。しかし自然音痴の人が今増えているのが心配です」というニコルさんの言葉が胸に沁みます。ウイルスの拡大は、自然破壊への警告でもあります。今こそ、私たちひとりひとりが「自然音痴」を克服する時でしょう。